

5月22日(日)全日本医師柔道連盟主催のもと、第27回全日本医師柔道優勝大会が東京・講道館にて開催。本年度は例年に比べ、20・30歳代の参加者が多く、若手のはつらつとした試合が展開された。

北海道から九州まで約60人の柔道大好きドクターが参加し、20歳～80歳代まで年齢別に試合を行った。80歳代の佐藤忠敏氏(本連盟副会長)は毎年富山より参加しており、また本年度は九州より福井仁士氏(佐世保共済病院院長)、さらに白水和雄氏(久留米大消化器外科教授)も特別参加し、多彩な顔ぶれとなった。

20歳代の楠和久氏(東大)は初参加であるが圧倒的な強さで優勝した。

70歳代の安河内渚氏(東大)は、約1ヶ月前に急遽出場が決まったの優勝であった。

本年度の大会は各年代で多くの番狂わせが起こった。中でも60歳代前期の部で連覇を狙っていた二村雄次氏(名大柔道部師範)が敗れる波乱が出現した。

女子の部では田中順子氏(名大)が初出場、初優勝を飾った。

試合終了後、表彰式次いで佐藤哲也審判長(皇宮警察名誉師範)による総評が行われ、懇親会では、プロの歌手・ピアニストによる身にコンサートを楽しんだ。

その後 出場選手の近況報告などを行い、来年の大会での再会を約し別れを惜しみつつ散会となった。

大会委員長 室田 直

師柔道大会に参加して 楠 和久(東大柔道部OB、東大医学部大学院微生物学教室)

私は名古屋大学の二村先生(第1外科教授、名大柔道部部長師範)に誘われて、今回の大会に参加した。前年度全日本実業団と日程が重なって出場できなかったこともあり、二村先生から連絡を受けた室田先生(滝山病院)が一ヶ月ほど前に電話で直接日程を知らせてくださり、非常にありがたかった。

5月22日日曜日、大会当日。1時半ごろ講道館6階の学校道場に集合。そのころにはもう大部分の人が見えられており、打ち込みをしたり歓談をしたりしていた。新原先生(福岡:せと山荘クリニック)の大きな声が響く。「前方回転受身を十分にやっておくように!」確かに投げられた際に肩から落ちて怪我をするパターンは柔道で最も多いパターンだ。そういえば私は前方回転受身を最近あまりやらなくなっていた。このようなたまに年1回柔道をするような人もいる大会では、怪我をなんとしても避けなくてはならない。幸い、今回の試合で大きな怪我はひとつも無かったように見受けられた。

この大会の特徴としては、マスターズ柔道大会の様に20代から80代までの年代別制、それでも数が多ければその中で体重別、もしくは例えば40代前期、後期と二つに分け、平均4-8名ほどのトーナメント戦を行う、という点が挙げられる。試合方式は3分、講道館ルール。片面は練習場所または控えとして空けておき、上座のほうの1試合場で全ての試合を連続して行うため、観衆全ての注視の中、いやがおうにも緊張感が高まってゆく。

私は20代の部に出場。対戦相手は決勝までの3人とも旧七帝大出身の選手で、寝技の防御が固い。決勝戦はお互いに寝技で攻める場面があるもとりきれず、旗判定に。私は赤。判定を待つわずかの間、赤上がってくれ、と心の中で念じた。結果、3-0の判定勝ち。微妙な判定であったと思われるが、何とか優勝することが出来た。

30代の部では、中量以下で中村先生(浜松医大卒、学生時代東海地区チャンピオン)、重量で紙谷先生(高校選手権個人無差別3位、宮崎医大卒)が各々の力を発揮し優勝。医師柔道大会にもこういった歴戦の強者がいる。

柔道は「狂」をししばしば生み出しますね、とは東大柔道部の落合部長の言葉であるが、医師でありながら、これほど柔道に情熱を持って日々精進されている方がこれほど多く、そういった人たちと初めて接することが出来たのは大きな収穫であった。柔道で発散した何かを仕事へと各々生かしているのであろう。

試合の後2,30分程度の乱取りが行われた。二村先生は20代の選手を捕まえて延々と寝技で攻撃を続けていた。柔道に対する情熱に頭の下がる思いである。その後地下一階のJ・bienで打ち上げ。ミニコンサートも行われ、年に一回の交友を各々が暖めあった。とてもいい会であった。